

# インダス文明起源の問題

——矛盾とその源——

徐 朝 龍

【要約】 本稿は、インダス流域先史時代研究における最大の課題である Harappa 文化の起源問題をめぐり、これまでの「先 Harappa 文化説」と「初期 Harappa 文化説」とが抱えている最も根本的な矛盾を指摘し、それらの矛盾の源を解明することを目的とする。両説は「先 Harappa 文化」（または「初期 Harappa 文化」と盛期 Harappa 文化との系譜関係を議論するにあたって、両者の土器が明確に異質であるにもかかわらずこれを結び付け、ないしはその異質性を過小評価し、無視した上で成り立っている。この傾向は二つの要因による。一つは、発掘を経た一部の遺跡で確認された両文化の層位的上下関係を文化継承関係においても、「先」または「初期」を主張する根拠としていること。もう一つは、盛期 Harappa 文化を産んだ先行文化が未だ発見されていないにもかかわらず学説の成立を性急に求めてきたことである。しかし、筆者によれば、両文化が重なりあう遺跡の層位状況を細かく検討すると、両文化の間には明確な断絶が認められるのであって、従来の学説が成り立つための最大の根拠である、時代の前後関係をもって、文化の系譜を考定することはできないのである。一方、この成果に立つと、いわゆる「先 Harappa 文化」（または「初期 Harappa 文化」）は、土器の異質さに代表されるように、上に重なる盛期 Harappa 文化とはそもそも異質な文化であることも明快に説明できる。そして後者は自らの先行文化を Moenjodaro の下層部にもっているということは筆者が先に明らかにしたとおりである。両者が一部の遺跡で重なりあうのは全盛期を迎えた Harappa 文化の拡張の結果に過ぎない。これら基本的な根拠から、インダス流域では第三千年紀にわたって「Kot Diji 文化」と「Harappa 文化」という二つの異なる文化が併存し、前後して繁栄したという新しい見方が最も合理的な理論として確固たる地位を得るであらう。

史林 七四巻三号 一九九一年五月

## はじめに

インダス流域における先史時代の文化のうち、盛期 Harappa 文化 (Mature Harappan Culture) に先立つ諸文化の性格 (特に Harappa 文化起源問題の関連において) をめぐって、これまで「先 Harappa 文化説」(Pre-Harappan) と「初期 Harappa 文化説」(Early Harappan) とが並立してきた。しかし、これまでの研究を見てもわかるように、長年にわたる努力にもかかわらず、これらの学説は問題の決定的な解決に結び付くことができなかった。つまりこれらは、学説とはいっても、あくまで理論上の「完成」にとどまり、考古学的な実証によって完全に支持されるまでに至らなかったと言わざるをえない。それどころか、以下に述べるように、この二つの学説ほど矛盾の大きいものはない。

確かに、インダス流域における先史考古学を取り巻く状況により問題の解決が阻まれる部分もあるが、一九二〇年代から八十年間近く続いてきた研究の積み重ねがあのような矛盾に満ちた学説に集約されるはずはないと、かねてから疑念を抱いている。そこで筆者はこの二つの学説がなにを根拠に打ち出されたのか、もう一度原点に立ち戻って考えなおす必要があると考える。本論は、これまでの学説に対してその核心の部分から分析をおこない、その最大の矛盾点を明らかにした上で、決定的な考古学の証拠を踏まえて「先 Harappa 文化説」と「初期 Harappa 文化説」とが存立する根幹にかかわる問題を指摘し、インダス流域先史文化を理解する正確な道が他にあることを立証したい。

### 第一章 「先 Harappa 文化説」批判

インダス平原において「先 Harappa 文化」の存在が最初に知られたのは、インド地方(Sin)のインダス川右岸に位置する Amri 遺跡である〔図一〕。一九二九年の年末、当時のインド考古局の N. C. Majumdar がこの遺跡で試掘を行い、「インダス文明」文化層の下にそれまで知られなかった文化層を発見した。そこで、彼はまずその文化を「先 Indus 期」

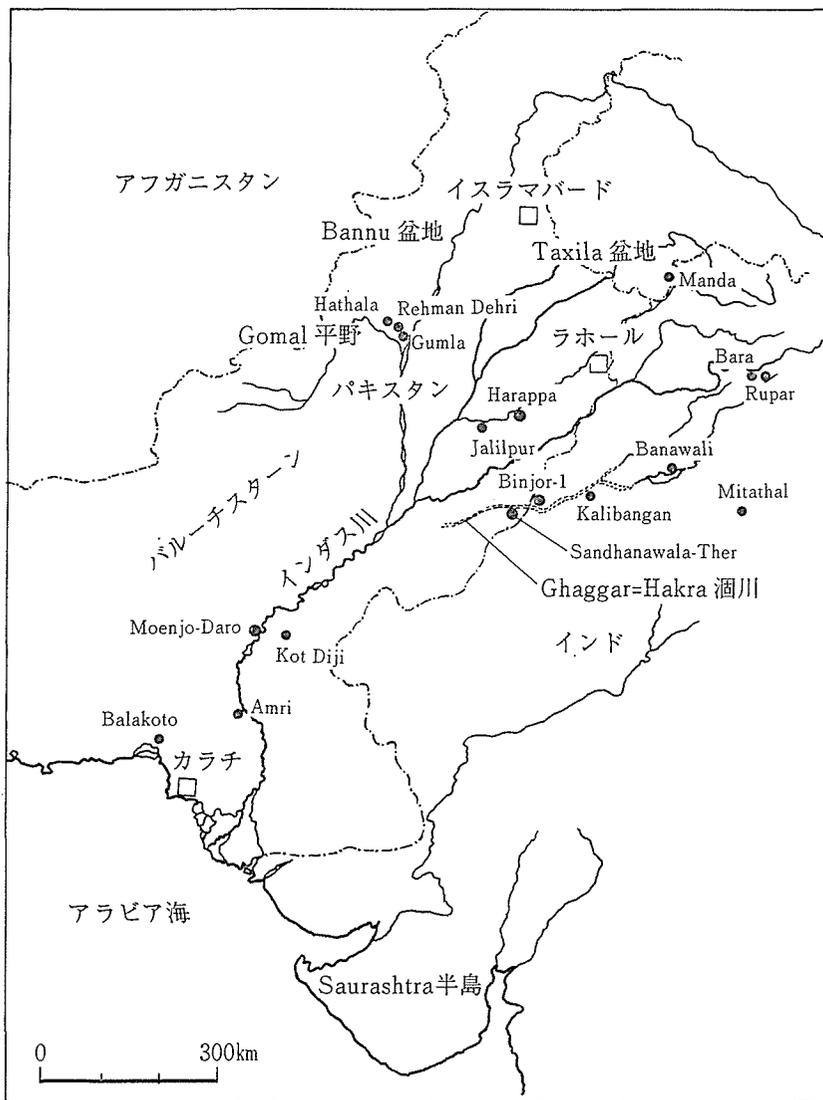


図1 関係遺跡地図

または「先 Mohenjo-Daro 期」に帰属させることにした。彼がこのようにしたのは、単にその文化層が「インダス文明」層の下に横たわっていたためではなく、その文化的な相違にも注目していたからに違いない。というのは、彼は、Amri の発掘報告書の中で「the fundamental difference both in technique and decoration, between the two wares, would suggest not merely a difference in age but also one in culture between the two strata」と明確に指摘しているからである [Majumdar 1934: 26]。それ以来、「先 Harappa 文化」というターミノロジーは、バルーチスタン丘陵部 (Baluchistan Hills) における Kulli 文化、Nal 文化などとともに Amri 文化にも適用されるようになった。

一方、一九四六年の Harappa 遺跡の城塞下層に対して発掘を行なった M. Wheeler は、そこから発見した盛期 Harappa 文化と異なる様相を示す文化に対して「先 Harappa 文化」と呼んだ。彼がそう名付けたのは、単にその文化が Harappa 文化時代に築かれた城塞の下にあるという層位的な関係に基づいただけではなく、「文化的に根本的な相違を帯びるものである可能性」(the probability of a basic difference of culture)、または「違った、もしくは、異質な文化」(a variant or even alien culture) という点に対してもかなり重視して来たからである [Wheeler 1947: 91-93]。

それ以降、Kot Diji や Kalibangan などの遺跡における盛期 Harappa 文化層の下に発見された文化に対して、一九七〇年に「初期 Harappa 文化説」が登場するまで、ほとんどの学者は「先 Harappa 文化」としてその性格をとらえ続けていた。このことは、彼らが最初では基本的に Majumdar と Wheeler と同じ認識をもっていたことを示している。即ち、「先 (Pre)」という定義をもって Harappa 文化に先行するという时期的な前後関係を強調する。同時に、「原 (Proto)」ではないという意味において文化系譜上からも Harappa 文化との間に一線を画しているわけである。これが「先 Harappa 文化説」を打ち出す原点であるとも言える。どうまじもなく、「先 Harappa 文化説」の主張者たちにそういった認識を持たせたのは、個々の遺跡で認められる盛期 Harappa 文化層と、その下に横たわる「先 Harappa 文化」との間における文化内容上のあまりにも著しいコントラストによると思われる。すなわち、「先 Harappa 文化」と盛期 Harappa

文化との間に見られる、歴然とした外見上の相違、主要素の構成、文化の質およびスケール等の面における格差、さらに急激な変容こそ、彼らが「先 Harappa 文化」の発見から数十年も経過しているにもかかわらず、あえて両文化をそのまま系譜的に結び付けることに踏み切れないでいる根本的な原因であると、筆者は考えている。確かに「先 Harappa 文化」の中にそれぞれ地域グループに分けられるほどのバラエティーは認められるかもしれない。しかし、これは彼らにとってさほど決定的な要素であるとは思われない。たとえば、「Sohi 式土器 (Sohi Ware)」との類似性をインダス流域にわたる「先 Harappa 文化」遺跡で見出そうとした A. Ghosh による試みは、明らかにバラエティーよりも共通性の存在を強調しようという出発点に立ったものである (Ghosh 1965: 115-6)。また、Allchin 夫婦自身も、「實際紀元前第三千年代後半から第二千年代前半にかけてインダス流域全域における土器はブルーチスターンに密接に関連する単一の技術領域に属すると言えるかもしれない」と考え、「インダス流域にわたって西南部の Balakot から北部の Sarai Khola、または北東の Kalibangan まで、(Kot Diji 様式の)出現をもって、われわれは一つの統一された様式に向かう傾向を認めることができる」と指摘している (Allchin 1982: 162-3)。ところが、このように捉えられている文化がそのまま「Harappa 文化」そのものの前身と認定されるということになると、彼らは必ずしもそれに賛同する態度を示すとは限らない。それもそのはずである。なにしろ、「先 Harappa 文化」と「盛期 Harappa 文化」との間に見られる相違はあまりにも歴然と目立ちすぎるからである。

一方、前にもふれたように、「先 Harappa 文化説」が唱えられた最大の根拠は、Amir, Harappa 城塞と層、Kot Diji, Kalibangan などの一連の遺跡において認められた、層位上の上下関係であると考えられている。しかし、肝心な問題は、明らかにこの「先 (Pre)」とは、正確には Harappa 文化に対するのではなく、すでに成熟して全盛期を迎えていた Harappa 文化 (いわゆる Mature Harappan Culture) に先行する文化に与えられたものに過ぎないという点である。この点については主張者たちもよく承知しているはずである。これは、即ちこれらの文化に対して、もし正確に名を付

けるとすれば、「先盛期 Harappa 文化」(Pre-Mature Harappan culture) という学名を与えなければならぬのである。しかし、こうなると、「先 Harappa 文化」が盛期 Harappa 文化とは系譜的に直系関係にあると認めない限り、盛期 Harappa 文化に対してあらためてその前盛期時代の文化にあたるものを考古学の現場で見出さなければならぬわけである。だが、それは当時においてはほとんど不可能なことと見られていた。従って、「先 Harappa 文化説」が最初から一つのジレンマに陥っていたことは明らかである。

おそろしく、ほぼ間違いない Majumdar と Wheeler とは最初から「先 Harappa 文化」とは別に盛期 Harappa 文化にはそのみずからの発展前段階がインダス平原そのものか、あるいは他のどこかにあったと考えていた。というのは、Majumdar はその報告書の中で自らの調査を通じて明らかにした Harappa 文化(インダス文明)を二つの段階に分け、その前段階が Amri 式土器を特徴とする文化と並行して存在し、後段階がその両者に続いて「インダス文明」たるものになると理解してゐるのだから、(these sites represent at least two phases of Indus, one co-existent with the pale ware culture and another posterior to it. Majumdar 1934: 150)。一方、Wheeler も「Harappa で城塞を築いたのは Harappa 以外のどこか(具体的には示さなものの)からやっつけた盛期 Harappa 文化をもつ人々であったと考えているのだから」(the fortification marks the arrival of mature Harappa culture. Wheeler 1947: 64)。従って、その時点まで唱えられていた「先 Harappa 文化」という概念は、今日の学説としての「先 Harappa 文化説」とは決定的な相違があることをここで強調して指摘しておきたい。

ところで、成熟した Harappa 文化については、かつて「侵入した文明」や「移植文化」や「移民文化」などの仮説が盛んになされてきたように、その成熟期までの発展段階はインダス平原そのものにおいて長い間極めて不明であった。従って、もし「先 Harappa 文化」の中に、散発的なものでもよいから Harappa 文化の「前段階的な要素」が見出されるようにしておかなければ、「先 Harappa 文化説」が学説として成り立つことは困難である。そこで、Majumdar、

Wheeler 以降の「先 Harappa 文化説」の継承者たちが考え出したのが、「先 Harappa 文化」の各グループから「それぞれの寄与 (Separately make-up)」がなされていた「インドス文明の形成段階 (Formative Stage)」あるいは「形成期 (Formative Phase)」が盛期 Harappa 文化以前にあったというアイデアである。なるほど、理論的には「形成する」のだから、「先 Harappa 文化」の中に存在していたバラエティーや Harappa 文化のものと異なるさまざまな要素は、全体が「Harappa 文化」という一つの統一した文化実体へと集約されていく過程において次第に消えるものであると想定しても不自然ではないかもしれない。それで「先 Harappa 文化説」はその最大の弱点が補完され、成立したというわけである。そして、のちになって、こうした理論上の整合傾向が次第に強まるにつれて、いつのまにか「先 Harappa 文化」とともに「原 Harappa 文化 (Proto-Harappan)」という定義も用いられるようになった。こうして、「先 Harappa 文化説」もすこしずつ Majumdar と Wheeler らの認識の真髄から遊離し、変質し始めたのである。

ところが、問題はそう単純ではなさそうである。これまでの研究をみても明らかのように、村落文化的な性格を濃厚にもつ「先 Harappa 文化」の中から散発的に見出された「原 Harappa 文化要素」はどのようにしてあのような壮大な都市文明の成立につながったのかという最も基本的な問題について、いくら資料を巧みに操作したにしても、その具体的なプロセスを考古学的に立証できた学者は未だに一人もいないのである。それもそのはずである。というのは、近年来フィールドで明らかにされた多くの証拠が示すように、「先 Harappa 文化」と称される文化は、そもそもインドス文明の形成そのものにはほとんどなら「寄与」もしていなかったからである。にもかかわらず、多くの「先 Harappa 文化」論者は、マクロな視点からインドス文明の「大きな要素」やら「文明成立の必要前提」やら、「自然進化」から「力強い転換」など、さまざまな抽象的な用語を駆使して説明を溥衍し、あたかも Harappa 文化の生成はいわゆる「先 Harappa 文化」から複合されてきたように、イメージ的に復元作業を進めてきた。これは考古学的な実証をおろそかにして理論的構成だけを先行させることであり、結局いつまでもたっても学説は「机上の空論」にとどまり、問題の解決には役に立たないで

いる。

整理してみると、「先 Harappa 文化説」は、二つの基本認識の上に成り立っていると考えられる。つまり、(1)発掘された一部の遺跡で認められた層位関係に基づく両文化の時代前後関係の認識である。(2)「先 Harappa 文化」と「盛期 Harappa 文化」とに対する文化系譜上の性格づけである。もし、この二つの基本認識が正しいものならば、矛盾などは起きず、問題もとくに解決されたはずである。しかし、現状ではそれが難題に直面しているのである。まず、(1)の基本認識では両文化が発掘された遺跡で確かに層位的に上下関係にあるので、その上下関係を単純にそのまま受け止めれば、時代的にも前後関係にあることを認めざるをえない。一方、(2)の基本認識については、最初の時点から「先 Harappa 文化」と「盛期 Harappa 文化」とは、基本的に異質な文化であるという立場を容易に変えようとする。となると、「先 Harappa 文化説」論者が直面しているジレンマは明白である。つまり、「先 Harappa 文化」が「盛期 Harappa 文化」の直系の先行文化ではなく、あくまでも基本的に異質な文化であるという認識を変えないかぎり、後者が前者を母体にしてできたものではないと考えなければならぬ。一方、上のようなとらえ方をしながら、(1)のような時代の前後関係に対する単純認識にこだわっていくと、他に Harappa 文化の母体にあたる文化実体を見出さない限り、後者の盛期 Harappa 文化がいかにして「異質」の前者から発展してきたのか、という過程を具体的に証明することが当然要求されることになる。ところが、現実では「先 Harappa 文化説」の論者たちはそれができないと一般的に考えている。そこでそのジレンマを解消し、学説を樹立させるためには一定の修正が必要となってくるのである。

まず、「先 Harappa 文化説」の論者たちにとっては、(1)の時代の前後関係については一応層位的な上下関係という目に見える証拠があると理解されているので、その認識は改められない。一方、両文化に見られる相違があまりにも顕著なので、(2)の基本認識の核心もほぼ動かないものである。すると、学説を成り立たせるためには調整の方法は一つしかないようである。即ち、「先 Harappa 文化」の中に「Harappa 文化的な要素（またはインダス文明的な要素）」を見出し、それ

インダス文明起源の問題（徐）

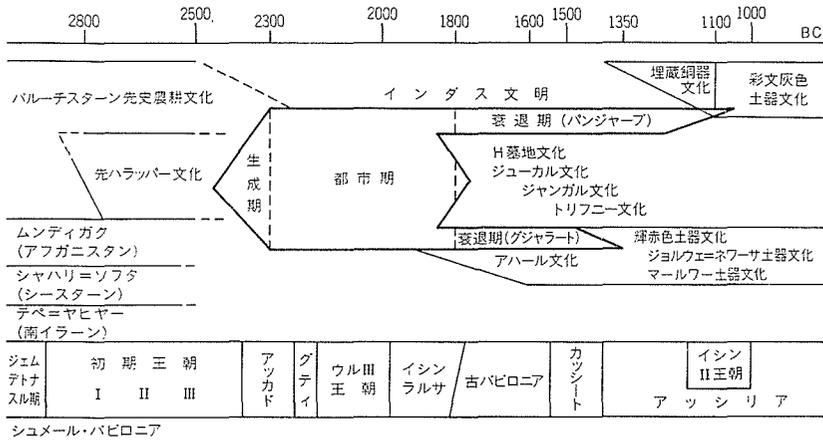


図2 「先 Harappa 文化」説の図式（辛島昇他，1980より）

をもとに Harappa 文化の「生成期」を設定するという方法を採らざるをえないわけだが、それは直接に問題解決につながらないとしても、かなりの余地は残ることになる（図2 辛島昇他…一九八〇）。そうした修整（正確には「整合」というべきだが）の結果は「先 Harappa 文化説」の成立であり、そしてその行方は先に述べた「原 Harappa 文化」という認識の台頭につながるのである。しかし、整合することによってもう一度い解くことができない矛盾はこの学説にとって依然として決定的な欠陥のまま温存されていることに変わらぬ。

第二章 「初期 Harappa 文化説」批判

ところで、「先 Harappa 文化説」におけるこうした整合傾向をエスカレートさせた形で一九七〇年代初頭に登場したのが、M. R. Mughal によって提唱された「初期 Harappa 文化説」である（Mughal 1970）。とはいっても、両説の間には基本的立場における決定的な相違があるのである。これは、新学説が盛期 Harappa 文化との関係を論じる際、「先 Harappa 文化」のもつ文化的な異質さを極力抹殺しようとし、その物質文化面における「均一性」を強調するとともに、その中に混在する「インダス文明的な要素」とされる部分を取り上げ、あたかも盛期 Harappa 文化の核的な存在であるように拡大解釈しているからである。つ

まり、新学説では、散発的な「Harappa文化」要素が異質文化の中に発生するのではなくて、「先 Harappa文化」そのものが初期段階の Harappa文化にあたるものであり、直接にインダス文明の基礎たるものなのだというわけである。こうして Mughal は「先 Harappa文化説」が乗り越えられなかったハードルがこれで克服できたかのように、その新学説を従来の理解からの理論的枠組みにおける「革命的転換」としておおいに誇っている。

分析してみると、「初期 Harappa文化説」も二つの基本認識の上に成り立っていると考えられる。提唱者の Mughal は、インダス文明(Harappa文化)の起源ないしは開始の問題に以下の二つの面があると帰結しているようである。(1) 充分に発達した Harappa文化より年代的に古い時代の文化的遺物の明確な描写と、インダス文明と比較してそれより古い文化的現象の復元。(2) 都市化へ向かって発展するであろう過程の復元(Mughal 1975: 43)。実際、その第一の面はとりもなおさず文化の時代関係に対する基本認識に立つものである。即ち、一部の遺跡で見られる層位的前後関係をもとに、「Kot Diji文化(初期 Harappa文化)」は「年代的に(Chronologically)」「盛期 Harappa文化」に先行するということなのである。これで「初期(Early)」と「盛期(Mature)」とつたようにもともとらしい発展段階を Harappa文化に与えることにより、「先(Pre)」対「盛期(Mature)」とつた「先 Harappa文化説」が抱えている不合理さも解消されたことになるというわけである。これに対して、第二の面は文化の性質に対する定義に基づくものであると理解してよからう。即ち、土器をはじめとする一部の他の遺物、遺構から見出された「均一性」、または「等質性」を通じて「Kot Diji文化」と「盛期 Harappa文化」との間の系譜的なつながりを強調し、「初期 Harappa文化」がそのまま「文化的に(Culturally)」インダス文明の「形成段階(Formative Stage)」にあたることを主張したのである。この説において時代関係に関する認識は「先 Harappa文化説」との立場とは一致している。こうした認識に立った上で第二の面の解釈へと展開してゆくものだから、当然のことながら、「Kot Diji文化」に関連するすべての遺物は、実は文化的にインダス文明の初期形成期、あるいは初期の都市文化相、初期発展期をなすものと結論づけざるをえなくなったのである」(Mughal 1980: 6)。

ところが、仮に層位的な前後関係が成り立つとしても、先史考古学的な立場からみて、文化の系譜を議論するのに絶対不可欠な土器(型式、材質、紋様構成、製作技法など)の継承関係になると、「先 Harappa 文化(または原 Harappa 文化)説」と「初期 Harappa 文化説」はいずれも完全な劣勢に立たされていることがわかる。問題は、誰しも否定できない、そして Mughal 自身でさえも認めていることだが、「初期 Harappa 文化」と「盛期 Harappa 文化」との土器系統において基本型式、器種構成、製作焼成方式、材質および外觀などによって明確に示される「基本的な異質性(Basical Difference)が存在しているところにある。この点は Mughal の学説にとってはまさに「アキレス踵」である。

これまでの研究を振り返ってみてもわかるように、盛期 Harappa 文化以前の文化のありかたに関する理解はほとんど土器を中心に行われた研究の上に成り立っているのである。実際に「先 Harappa 文化」を異質的なものとして最初に捉えた学者たちもあくまでも土器に対する認識に基づいて学説を打出したのである。従って、同じく「異質性」を認めるという意味においては、Mughal の宣言した「革命的な転換」は「先 Harappa 文化説」から全く進歩していないとも言わざるをえなう。Mughal の提唱した「初期 Harappa 文化説」を見ると、「初期 Harappa 文化」が盛期 Harappa 文化と文化的につながっていることを証明するために彼が証拠としてあげたのは、一部のテラコッタ製品、城塞の存在、遺跡の分布パターンなどのほかに、土器群の主流をなし、普遍的な存在としての器種ではなく、Kot Dij 文化(初期 Harappa 文化)層に散在していた個別の「Harappa 文化的な要素」をもつとされた土器およびわずか二つの紋様構成要素であることがわかる [Mughal 1983: 14]。

しかし、ただ一つの層を隔てると、それまで主流でもなかったごくわずかの土器のみがどのようにして技術的にも質的にも全く異なる Harappa 式土器群を産み出したのか、という素朴な疑問は誰しも抱くであろう。明らかに土器全体の流れが型式学的に「Kot Dij 文化(初期 Harappa 文化)」から自然かつ円滑に「盛期 Harappa 文化」へと移行していくというプロセスを具体的に証明することは、Mughal にはびきなうているのである。すべての点において「盛期 Harappa

文化」を「形成する」文化なのに、最も重要な文化要素である土器だけは例外であるということは非常に理解に苦しむ。しかも、文化的に「同一」なものであるはずだし、層位的にも重なっているにもかかわらず、である。本来なら、二つの土器群に対してそれぞれの器種における型式学的な発展を追求し、両者間の継承関係を立証した上でではじめて文化の継承関係を主張するのが先史考古学の筋道である。少なくとも Mughal 説ではこの考古学の基礎的な作業はおろそかにされていると思えない。土器の「主流」をなす部分は、伝統の上で Harappa 式土器とは「基本的な異質」を示していると認めていながら、なお「文化伝統上の継続 (Continuity of Cultural Tradition)」に固執しようとしたため、主に土器の「均一性」に基づいてまとめられた汎インダス流域に広がる「初期 Harappa 文化」はその当然の後継者であるはずの「盛期 Harappa 文化」とは「異質な土器」をもつという、極めて滑稽ともいうべき結果に辿り着いてしまったのである。それでは、文化の性質規定にあたってこの中心をなす土器がほとんどその直系の後継文化であるはずの盛期 Harappa 文化のそれとは「伝統上で基本的に異なっている」[Mughal 1975: 43] ということは、かつて「先 Harappa 文化説」の出発点にあるように「文化の異質を示す」と理解されなければ、いっただいどう解釈すればよいのであろうか。この重大な疑義に対する Mughal の説明はいたって簡単である。彼によれば、つまり、「初期 Harappa 文化」が成熟期に入ってから新たな土器型式や彩文様式などが導入されたとしておけば、筋道が通るといっただいである [Mughal 1980: 8]。だが、成熟期になって従来の土器伝統をほぼ全部廃棄し、新たな土器型式、彩文様式、および土器質の低下をもたらし製作技法をあらためて一斉に導入する必要はなぜあったのか、その導入の動機と根拠および社会的背景はどうなっていたのか、また、導入の過程は型式学的な検証を通じて証明できるのか、といった素朴な疑問に対して、これまで Mughal からはなんら納得のいく説明もない。この問題ははたしてそれほど簡単に片付けられるものなのであろうか。土器が研究対象の主体になっっている現状を考慮すると、「先 Harappa 文化説」では率直に認められており、そして Mughal も結局乗り越えなかったこの「異質」の問題こそ、むしろ両理論そのものの存立にかかわる性格を帯びるものであるように考えざるをえなく

なる。

このように、「先 Harappa 文化説」にしろ、「初期 Harappa 文化説」にしろ、そのいずれも「インド文明への移行」のプロセス、または「都市化へ向かう過程」を、たとえ理論的に強行突破できたとしても、土器型式の研究という最も基本的な作業を通じて具体的かつ実証的に復元することができないという、最大のハードルを抱えているわけである。それはなぜなのであろうか。その原因はいったどこにあるのであろうか。特に「Harappa 文化」とその下にある文化との間に広く認められる「異質」とははたしてどんな意味をもつものであるのか、これらの問題こそ、インドス流域先史文化研究をこれ以上進める上でまず解明しなければならないものである。

難問に挑戦するには具体的な手掛りが必要である。筆者としては土器に關しての両学説による「異質」という認識には基本的に同意している。最も疑問を抱くのが、両学説が程度の差があるにせよ、ともに文化面におけるつながりを樹立させるために「類似性」、「共通点」および「均一性」などを極力強調する反面、その「異質さ」を見落とそうとしているという点である。この二つの学説を詳しく分析してみると、その傾向はいずれも時代の前後關係に対する固執から起因していることに気がついた。つまり、「異質」と認めながら、あえて無理をしても両文化を系譜的に結び付けようとする最大の理由は、おそらく前にあげた両説に共通する基本点の一つ、つまり両文化の時代關係に対する認識にあるのではないかと考えるに至ったのである。

ここでは、両説はいかにも層位上のつながりには全く問題のないように、ともに両文化の時代關係に対して、あくまで「正常順位」にあるという認識を貫いてきたというところにまず注目したい。それについて、筆者はいくつかの初歩的な疑問を感じているのである。たとえば、なぜこのような層位關係がインドス平原における絶対多数の關係遺跡において同様に認められないのか。明らかに「異質なもの」どうしなのに、なぜ同じ遺跡で重なっているのか。重なりあっているからといって、異質なものを必ず一系に結び付けて扱わなければならないのか。そのような重なりあう状況を形成す

るのに他の原因があったかどうか全く分析する必要はないのか。そして、このような層位関係に対する理解ははたして完璧な証拠に立脚するものであって、疑われる余地は全くないのであろうか、などの点がまず考えられよう。即ち、両説の基本点の一つに矛盾(「異質」問題)がある以上、順を追えば、その出発点になるはずのもう一つの基本点(時代関係)も検討の対象にする必要が当然考えられなくてはならないのである。両説が程度の差こそあれ、ともに「異質」の存在を認めている以上、「異質のもの」がなぜ重なりあうのかという最大の疑問を解くために、両文化がともに存在すると確認された各遺跡における層位の具体的なありかたに対する再検討が必要となる。

### 第三章 層位関係に関する分析

「先 Harappa 文化(または初期 Harappa 文化)」と「盛期 Harappa 文化」とが時代的に前後関係にあるという認識を決定的にしたのは、いくつかの発掘を経た遺跡において両文化が層位的に重なりあって確認されたことである。ところが、この時代関係を支えるこれらの数少ない遺跡において、これまでその文化層の重なりかたにかかわるいくつかの重要な事実が、一部の学者に意識されていながらも十分に重視されないうてきているのである。注意深く観察すると、これらの事実が「先 Harappa 文化説」にとっても、「初期 Harappa 文化説」にとっても都合のよくないものであり、取り上げられれば、学説そのものの崩壊につながりかねないほどのものであるように思われる。これほど重要な事実なのに、まったく強調されていない、というより、むしろ意識的に見過ごされてきたと理解した方が真実に近いかもしれない。そこで筆者はこれらの「回避」されてきた事実を発掘報告書から検出し、インダス平原における先史文化の展開を正しく理解する上でそれらの事実がもつ極めて重要な意味を考えてみたい。

これまで「初期 Harappa 文化」と「盛期 Harappa 文化」とが重なりあう証拠が発掘調査を通じて層位的に確認された遺跡として Amri, Harappa, Kot Dijli, Kalibangan, Sandhanawala-Ther, Gumla, Balakot, Banawali, Binjor-1

などがあげられる(ただし、北東周辺地域において両者が最初の文化層から混在する Mitathal, Bara, Rugar, Manda などの多くの遺跡を除く)。また、Saurashtra 半島には「初期 Harappa 文化」に該当するものがない。そのかわりに、性格の異なる「先 Harappa 文化」が存在していたが、これについてはのちにまた触れることとする)。以下、この順に従ってこれらの遺跡における層位状況を具体的に検討してゆきたい。

[Amri]

インドス平原において盛期 Harappa 文化層の下に先行文化が存在することがはじめて発見された Amri では、一九一九年に Majandar が試掘を通じて最初の Amri 式土器を Harappa 文化(報告書ではインドス文明とされていた)層の真下にある「黒ずんだ土層」(Darker Soil)、または「黒い土層」(Layer of black earth)から検出した [Majandar 1934: 26]。彼は、その土層以下の Amri 式土器を含む文化堆積を「より古い時期」のものと位置付け、その土層をはさむ上下文化層の土器に見られる製作技法と装飾様式および質に示される「基本的な相違」(Fundamental difference)は、上下層の間に年代差があるのみならず、文化的な異質さも示唆していると強調したが、上下文化層を切り離していたその黒ずんだ土層はなにを意味するのかということについては、試掘という制限もあったため彼はあまり深く考えていなかったようである [Majandar 1934: 26]。

その後、一九五九—六二年にわたって Amri 遺跡を正式に発掘した J. M. Casal は、Amri 文化と盛期 Harappa 文化との交替を唯一層位的に示す B マウンドにおいて、II B 期の文化層 (Amri 文化最終期)と III A 期(盛期 Harappa 文化期)の文化層との間に、一九二九年の Majandar による発見に続いて、再度「灰と混乱層」(tres condenses et tres sales)の存在を確認した [Casal 1964: 42; English Introductory: 7]。彼は、上層の地表に近い部分が黒っぽい灰層になっていることを指摘し、II B 期の最後に Amri でなにが起きたかという点について判断は難しいとしながらも、「暴力(violences)」

か「火災 (Incendie)」かによる「破壊 (Destruction)」という状況認識をはじめてはめかしている [Casal 1964 : 42]。

一方、彼は、遺跡の東にある A マウンドにおいて Amri 文化が II B 期を最後に終息したのち、III B 期が始まるまでの間そのマウンドが放棄されていたことを明らかにした [同前掲注 : 22]。これは、即ち、その A マウンドにかぎっていえば、Amri 文化とそれに続く盛期 Harappa 文化との間に、III A 期という時期にあたるギャップがあり、Amri 文化は III A 期の始まりにあたってそこで途絶えたと考えられるわけである。

いずれにせよ、Amri 遺跡においては、盛期 Harappa 文化期に Amri 文化の要素が少数残っているとはいえず、Amri 文化と盛期 Harappa 文化とが「初期」と「盛期」という序列で同一系譜のものとしてスムーズに発展したという主張には層位的な支持が与えられないといつてよからう。ちなみに、発掘者の Casal は基本的に Majumdar と Wheeler らと同じ認識をもち、Harappa 文化が「先 Harappa 文化」に含まれる Amri 文化から発展してきたとする意見に早くから否定的な見解を示し [同前掲注 : 53-54]、しかも Amri III 期以前の文化と並行する Harappa 文化の存在を見出す希望を Moenjo-Daro の下層に託していた [Casal 1964, 1979]。

#### [Harappa 城壁下層]

一九四六年、Harappa で発掘がおこなった Wheeler は A B 遺丘の西で泥煉瓦づくりの城壁を発見した。そして、その城壁の下に横たわる「Pre-Defence」と名づけられた 26 層と 26 A 層 (HPXXX) の文化堆積から現在広く知られている「Kot Diji 式土器」の破片を最初に検出したのである。それらの土器は城壁の建設時期とからんで三つの状況のもとで出土したという。つまり、(1) 城壁の基礎部以下に横たわる単純な文化堆積層から、(2) 城壁建設の最初の段階の間における堆積層または、26 A 層とされた建築層から、(3) 城壁を作るのに用いられた泥煉瓦などの層から、となっているのである [Wheeler 1947 : 90-95]。発掘者は、城壁建設の始まりは Harappa 文化の人々の到来を告げるものとし、そして、城壁が

作られるまでの Harappa は、広範囲にわたる周期的な洪水襲来を被りながら、(Harappa 式土器とは)「異なる(Variant)」または「異国的な(Alien)」土器群を使う人々が住む町(Town)、または村(Village)であったと推測している(同前掲注: 64)。

Harappa 文化の人々が城塞を作る時、この町(村)を掘り返していることや、最初の積み土(Working-Platforms 以下)の中に含まれているのがわずかに二点の Harappa 式土器破片を除くと、すべて以前の住民たちの使った土器(Group: i-iii)しか入っていなかったのに対して、それ以上の層では逆に大量に(Fair Quantity)出土した Harappa 式土器の中に比較的古い時期のものと思われる土器破片は6点しか混在していない(Group: iiii)という対照的な現象から見ても、両者は重なりあってはいるものの、同一伝統に基づいた文化のものとは考え難い。言い換えれば、ここでも異質な土器によってそれぞれ代表される両文化は前後一系の関係にないことが確認できるのである。むしろ、Wheeler による「文化の基本的異質」(同前掲注: 91)という指摘が両者の関係を的確に説明しているといえる。

一方、アメリカ調査隊による最近の Harappa 下層の発掘も Wheeler の発掘と似た結果を出している。その報告によると、三つの時期に分かれる文化層の存在が明らかにされ、そのうち最も古くのが「初期 Harappa 時期」のものであるという。それを代表するのは Kot Dij 式土器破片をともなう泥煉瓦の建築遺構で、盛期 Harappa 文化に属する焼き煉瓦の城壁の直下から検出された。また地山に接したこの文化層は所々で盛期 Harappa 文化の人々による城塞建設の際に地山まで掘り下げられ、そのため両文化の遺物の混在が生じているという(Dales & Kenoyer 1988: 307)。

一方、「初期 Harappa 文化説」の賛同者でもある発掘者は、当然のことながら地山以上の「初期 Harappa 文化」から地表の後期 Harappa 文化(the Late Harappan)まで重なる文化層を E マウンドの北西壁で確認したと主張することを忘れていないが、肝心なその重なる状況の詳細については全く触れていない。

[Kot Dijī]

Kot Dijī を発掘した F. A. Khan は、一九五八年に『ロンドン画報』への特別寄稿の中に次のように記述している。「(遺跡の) インドス時代の町の最下層の下に、広い範囲におよぶ大火災と前の住居に対する徹底破壊を示すと思われる焼けた物質の層がいたるところに広がっている。その地点以下岩盤までは、特別に「Kot Dijian (文化)」という名が付けられた本質的に異なる文化の堆積がある」と [Khan 1958: 86]。その後、一九六五年に発掘報告書を刊行した際にも、彼は「4層(筆者注: Kot Dijī 文化の最終層)の表面にある厚い焼け焦げた物質の層が遺跡全体に及んでおり、(これによって)下の文化層は完全に上の文化層から切り離されている」と述べ、Kot Dijī 文化の住民は「暴力的にかき乱され、(村も)完全に焼かれて破壊されたかもしれない」と推測している。そこで彼はそのような現象を「文化シーケンスにおける断絶」(Break in Cultural Sequence)と解釈した [Khan 1965: 22]。

Khan によるこのような解釈は、「先 Harappa 文化」と「盛期 Harappa 文化」との間に「破壊層」と「文化上の断絶」があることを最初に明確に指摘したものである。正式な発掘により、Kot Dijī において「城塞部 (Citadel)」の4層の上に遺跡全体に及ぶ多くの炭化物を含む厚い焼け層が確認されている [同前掲注: 22]。一方、「市街部 (Outer City)」にも第3層を覆うように厚い焼け層が認められる [同前掲注: 34-35; Pl. IV]。注目すべきことは、いうまでもなく、この「焼け層」はその上に重なる「Mature Harappa 文化層」をその下に横たわる「Kot Dijī 文化層」から分離しているという事実である。それに、発掘者はこの焼け層を挟んで上下の文化層の間に文化内容における「突然な変化 (Sudden Change)」があると観察して気付いたため、「文化上の断絶 (Break in Cultural Sequence)」を指摘したのである [同前掲注: 20-22]。彼がそう判断した根拠には、単にこの焼け層の存在だけではなくて、Mughal も認めているような「Kot Dijī 文化」の土器と「Harappa 文化」の土器との間に明確に示される技術と型式における基本的な異質もその一つになっているに違いない。Mughal はその「焼け層」の意味は無視しているが、その存在自身は否定していない [Mughal 1980:

85]。いずれにせよ、この「焼けた層」の存在によって「Kot Diji 文化」層と「Mature Harappa 文化」層とが切り離されていることは動かない事実である。実は Kot Diji における「焼けた層」の存在は、のちに述べる Gumla 遺跡のそれとともに学界では早い時期からすでに比較的知られていたが、そのいずれもほとんど過小評価されたり、完全に無視されたりする運命にあつてきたのである。

〔Kalibangan〕

Kalibangan においては、盛期 Harappa 文化とされるⅡ期の文化層が「初期 Harappa 文化」のⅠ期が終わった後にすぐ重なつてきたものではないとどうもは城塞部のマウンド(KLB-Iと略される)で観察されている。そして、Kalibangan-Ⅰ期文化が地震の破壊によって終焉を迎えたことは、幾つかの発掘地点で認められた層位と建築物の裂開と転位(Cleavage-cum-displace)によつて裏付けられる。また、Ⅱ期の文化層が始まる前に遺跡の数カ所で侵食(Erosion)の跡と流砂の堆積(Accumulation of blown sand)が確認され、盛期 Harappa 文化の人々がやつて来るまでの間、Kalibangan は一時荒廃し、一定期間にわたる「Time-Gap」が存在していたと推測されてゐる [Lal 1979: 75-76]。その間には「先 Harappa 文化」の住民はその地域の近辺のどこかへ移動してゐたため、盛期 Harappa 文化期(Ⅱ期)になつてもⅠ期の要素が見られると発掘者は考へてゐる。従つて、Kalibangan においても「Harappa 文化」がいわゆる「初期 Harappa 文化」とは層位的には上下に重なつてはいるものの、實質的には互いにつながつていないことが明らかである。

一方、「市街地」(Town-site)には Harappa 文化の堆積は地山直上から始まつてゐると観察されている。そのうち、少数のⅠ期の土器も確かに混在しているが、だからといつて、それをもつて盛期 Harappa 文化がその前のⅠ期文化から産み出されたことにはならないであらう。なぜなら、両者はそこでは同時に存在しているからである。この現象については、筆者は発掘者と同意見である [Lal 1979: 76]。

[Binjor-1]

一九七〇年、インドの Rajasthan 地方北部 Anupgarh という町の北西、パキスタン国境近くにある Binjor-1 という遺跡が K. F. Dalal によって試掘された (Dalal 1982)。こゝをゆる「Pre-Harappa 文化」(Mughal の初期 Harappa 文化、筆者の Kot Diji 文化に当る、以下同じ)と「盛期 Harappa 文化」とが重なる証拠はトレンチ B において確認されている。トレンチ B においては地表から以下一〇センチまでが第一層とされ、Harappa 文化と Rangmahal 文化(歴史時代の地域文化)の土器の混在がその間に認められる。この層から下へ三五センチ進むと、第二層が分けられる。この層に含まれる文化内容は Harappa 文化のものである。さらに下へ行くと、厚さ一・六メートルにもおよぶ第三層がある。そこには泥煉瓦によるプラットフォームが観察されているが、その中の充填物として Kalibangan-1 期、Kot Diji および Harappa で発見された「Pre-Harappa 式土器」と同様な土器が検出されているという。

これらの土器破片については、第三層の遺物をも純粹な Harappa 文化 (True Harappan) に属するとした発掘者は、Harappa 文化の人々が先住民の廃墟に自分たちのプラットフォームを作った時に混入したものと推定している (同前掲注: 80)。従って、Harappa 文化と「Pre-Harappa 文化」とが文化的につながっている証拠はここでも見出されないといえよう。以上の層は第Ⅱ期とされている。なお、ここでもトレンチの北部分、プラットフォームのすぐ下に焼け焦げた土器を含む厚い焼土層 (Intense burning) が発見されている (同前掲注: Fig. 2)。これ以下約六〇センチほどの厚い層には単純な「Pre-Harappa 文化」(Purely Pre-Harappa) が含まれているという。一方、トレンチ C においても厚さそれぞれ二〇—三〇センチと六〇センチの第一層と第二層に Harappa 文化のものと「Pre-Harappa 文化」のものが含まれているが、地表からの混入物も検出されている。したがって、それ以下には「Pre-Harappa 文化」層が横たわっているものの、Harappa 文化との関係を説明するのにこのトレンチの証拠ではほとんど意味がない。このように、Binjor-1 遺跡に於いても「初期 Harappa 文化」が盛期 Harappa 文化へとスムーズに移行した証拠は存在しないことがわかる。

[Sandhanawala-Ther]

Bahawalpur 地方の Cholistan 砂漠を遡 Hakra 川に沿って北東へ行くと、インドとの国境近くに Fort Abbas と  
う古城がある。その北西五キロほどにある Sandhanawala-Ther とが遺跡は、一九四三年に Stein によって調査され、  
盛期 Harappa 文化とそれに先行する文化とが重なって存在していることが明らかになった。Mughal の引用によると、  
厚さ約九メートル (32 feet) もある盛期 Harappa 文化層の下に二メートルほどの「Sothi Ware (筆者注：インダス平原北  
東部における Kot Diji 式土器に当る)」を含む文化層が地山の上に横たわっていることが発見されたという。興味深いこと  
に、その両文化層はその間を「介在する包含物の貧弱な土層」によって分離されている。Mughal は、この「土層」を  
Kalibangan-I 期と II 期との間に見られる現象と比較して「(住居) 一時的放棄 (temporary abandonment)」と理解して  
いる。しかし、なぜ盛期 Harappa 文化層の始まる前に「放棄」が起こったのかについては彼は考えようとしなう [Mughal  
1970: 101-2]。いずれにしても盛期 Harappa 文化と先行文化とが層位的に直結していないことには変わりはない。

[Banawali]

Banawali は Haryana 州の Hissar 地方に位置している。ここでは、Kalibangan と異なって II 期の Harappa 文化  
の出現前に混合した文化現象を示すとされる「移行期」または「中間期」が存在することが報告されている [Bisht 1983:  
143]。その間には圧倒的な「Kalibangan Pottery」のうち、暗赤色のスリップの上に新しい文様と「原インダス的な」型  
式を表わす赤色土器をはじめ、テラコッタ製三角陶板、動物像、チャート石刃などといった、「Harappa 文化的な特徴」  
が一部でありながら登場するようになったと指摘している。I 期に帰属され、厚さ九〇センチほどもあるあの層について  
は具体的な記述が少なくかなり曖昧であるため、判断は難しい。発掘者の Bisht は、現場における実際に観察された前の  
文化とは「垂直的な継続 (Vertically Continuing) 関係にないある文化実体による新しい変化の波を決定的に現わす II 期の

文化様相」を根拠に、この層を「文化的な移行期」と見るのがまだ時期尚早とし、「両文化が出会う最初段階」を示す現象であるとする見方に傾いているようである。Ⅰ期の土器などが Harappa 文化にあたるⅡ期に入っても引き続き用いられているにもかかわらず、発掘者は Mugtai の説に同調しようとしなない。彼の基本的認識は二つの異なる文化という立場に立つものと思われる。それもそのはずである。Ⅱ期文化の始まりに関して、同遺跡の発掘者のひとりでもある Asthana による「突然な出現 (Sudden appearance)」という表現もなにも全く根拠のないものではないからである [Asthana 1985: 149]。実は Banawali では土器の異質よりももっと文化面の異質を示す現象が観察されているのである。すなわち、これはⅡ期の Harappa 文化の「壮大な出現」(Grandiose Appearance) にともなつて、従来の村のプランを完全に無視した新住民たちによる Banawali の全体的な大改造がなされているのである〔同前掲注：145〕。従つて、Banawali においては重なりあう層位的現象はあるものの、それは「初期 Harappa 文化」から Harappa 文化が産み出されることを裏付ける証拠にはならない。

#### [Gumla]

Gumla 遺跡において「焼けた層」が観察されたのはⅢ期とⅣ期との間に当たる層位である。長さ一〇〇フィートにも及ぶトレンチにおいてⅢ期文化層の表面が炭化した骨、灰と土器破片を含む厚い灰層に覆われている状態で発掘された。そして、すべての文化層の発掘断面 (Section) においても同様な位置にこの灰層の存在が確認されている。この灰層はその上のⅣ期文化層を完全にその下に横たわるⅢ期文化層から分離しているため、Ⅱ期の末に暴力的な破壊 (Destruction) があつたと発掘者が推測をおこなった根拠となつてゐる [Dani 1970/71: 39-46]。

しかし、Gumla における「焼けた層」の状況には、Kot Diji のそれとは異なる一面がある。これは発掘者の主張するように、Ⅳ期になつてもⅡⅢ期の文化要素(特にすべてのⅢ期の土器型式)が新しく登場した「Harappa 文化」のもの

並んで依然として引き続き用いられているところから、両時期の間に文化的な断絶があったとは考えられないことである。そこで両文化要素のうち、それを強調するかによって、Ⅳ期の文化に対する性格づけが決定的に左右されることになる。

ところが、文化的な断絶がないと主張しているながら、Ⅳ期を「Gumla における主要な Harappa 文化期」(同前掲注⑥)として位置づけているところを見ると、「初期 Harappa 文化説」に反対する立場をとっているはずの発掘者の見解に矛盾が生じていることがわかる。すなわち、文化の断絶がないとすれば、発掘者の自らの概念に従ってⅣ期の文化もⅡ～Ⅲ期と同じように、「Harappa 文化」ではなく、「Kot Dij 文化」と定義すべきなのである。一方、Mughal もⅡ～Ⅳ期の文化的継続を強調している [Mughal 1972: 122 注]。しかし、彼自身が「異質」と認める文化の帰属を決める中心的な要素である Harappa 式土器がⅡ～Ⅲ期に全く存在しないという事実からすると、彼の主張する「継続」も、結局Ⅱ～Ⅲ期以来の「初期 Harappa 文化(Kot Dij 文化)」そのものの「継続」のはずなのであって、Ⅳ期の文化的性格も盛期 Harappa 文化にはならないのである。というのは、そもそも文化的な断絶がないかどうかという判断は、原則としてあくまでもより古い時期において主流をなす文化内容との比較を基準に行われるべきだからである。Gumla のⅣ期より古く (Early Periods) Ⅱ～Ⅲ期における文化の主流は「Harappa 文化」に比較できる要素ではなくて、Kot Dij 式土器を特徴とするアセンブリッジなのであって、上述の原則に従って「断絶がない」と主張すれば、Ⅳ期の文化はⅡ～Ⅲ期以来の文化と共通する Kot Dij 文化と見なされてしかるべきなのである。

現実問題として Gumla における文化様相について最も説明が必要とされるのは、Ⅱ～Ⅲ期に見られない大量の「Harappa 文化」のものとして確認された新しい文化要素があつた「焼けた層」の直後に始めて登場するという事実である。これらの新しい要素がⅡ～Ⅲ期のそれと鮮明な対照をなすことは一目瞭然である。そこで問題となるのがあの「焼けた層」と新しい文化要素の登場との関連性という問題である。もし、あの「焼けた層」が Mughal の考えるように無意味なも

のであるならば、Ⅳ期に現われ、それまでのものとは「異質」と見られる土器をはじめとした新しい文化内容はⅡⅢ期に存在してもむしろ当たり前のことであろう。ところが、事実はそのようではないのである。そして、たとえあの「焼けた層」が単なる同一文化の展開過程におけるアクシデントの結果と見られるとしても、それは明確な「異質」を帯びる土器およびその他の文化要素が従来の文化から生まれるきっかけとなるとはどうてい考えられない。また、その層位的な位置を見ると、盛期 Harappa 文化的要素が現われる直前にそれが発生することは偶然にしてもあまりにも奇妙すぎる。したがって、新しい文化要素の出現とあの「焼けた層」とは別の意味における関連性があったと考えねばなるまい。この点を重視し、新しい文化要素の出現を異なる文化の到来を意味するものと理解する立場に立つ筆者は、Gumla のケースについて次のような二つの場合を想定できると思う。

(1) 村はⅢ期末に侵入してきた Harappa 文化の人々からの攻撃を受け、それによって一時的に破壊された。その後にもとの住民である Kot Dij 文化の人々は、巻き返して村を再建し、外敵の支配を許さないものの、「Harappa 文化」の要素を取り入れながらⅣ期文化をスタートさせた。この場合では、Ⅳ期における「Kot Dij 文化」の中心的地位が強調されることになる。

(2) Ⅲ期の末に Gumla はこの地域に新しくやってきた Harappa 文化の人々によって焼き払われて破壊された。その後「Harappa 文化」の住民の支配のもとでもとの住民の生存も許されていたので、両文化要素の混在する現象が起きる。この場合では「Harappa 文化」のⅣ期における主体的な存在が認められることになる。

つまり、(1)と(2)の場合において「焼けた層」という現象はいずれも「Harappa 文化」の到来にともなう事件の跡として認められても抵触しない。Gumla Ⅳ期文化の性格をめぐっては、従来の文化が新しい文化要素を吸収すると見るべきなのか、それとも新しい文化の主導のもとで従来の文化が生き残っていると認識すべきなのか、その地域における全体の文化状況を見た上で決定すべきである。それは(1)のケースを支持するものである。つまり、紀元前三千年代末から Kot

Dijii 文化が主体的な地位を維持し続けていた Gomai 平原では、盛期 Harappa 文化の存在がかなり弱かったことは、Harappa 文化要素の存在が確認された小規模な遺跡として Gumla、Hasan Dheri を除いてほかに見あたらないことや、Rehman Dheri や Hathala などの大きな遺跡における Kot Dijii 文化が盛期 Harappa 文化時代の末期(B. C. 1900 頃)まで栄え続けていたことから推測されるのである。また Gomai 平原のみならず、それより北の Bannu 平野や Taxila 盆地などの北西地方においても、盛期 Harappa 文化時代を通して「Kot Dijii 文化」がその伝統を保ちつつ存続していた。これらの重要な事実は、Gumla IV 期における Harappa 文化が、そこで主体的に存在していた可能性を一層少なくするものである。

いずれにせよ、Gumla では前にあげた Kot Dijii やほかの遺跡の場合と違って、IV 期には従来の「Kot Dijii 文化」と新しい「Harappa 文化」との間に完全な交替がなかったようである。しかしながら、「焼けた層」の直後に大量の「Harappa 文化」と認められる新しい要素が突如現われるという事実が否定できないかぎり、「Kot Dijii 文化」の要素が IV 期に残っていたとしても、「焼けた層」によって一時的に「Kot Dijii 文化」と「Harappa 文化」とが切り離されているという認識は、Gumla の場合に対しても依然として有効なのである。一方、III 期以来の主に土器を中心とする文化要素は IV 期にも存続していたけれども、それらは Harappa 文化のそれとは区別され、「異質」を明確に示すものとして一層一目瞭然となっているので、そのまま「Harappa 文化のもの」と性格づけることは明らかに不可能である。

[Balakot]

南バルーチスタン、アラビア海の Somniani 湾に近う Balakot 遺跡は、いわゆる「先 Harappa 文化」と「Mature Harappa 文化」とが重なりあう遺跡として最も南方に位置している。ここでは、一九七四年にアメリカ調査隊により、S 27 と S 25 と名づけられたスクエアにおいて I 期文化 (Pre-Harappan とやれづる) の土器と、II 期文化 (Mature Harappa

文化)の土器を含む層をはっきりと分離する層が認められている。また、H-1スクエアに盛期 Harappa 文化の時期に属する建築物の下部と「先 Harappa 文化」期の土器に覆われる層とを二分する、数センチの単純な砂からなる鮮明な分離層(Sharp clearly defined separation)が確認されたのに続いて、その隣のH-2スクエアにも純粋な「先 Harappa 文化」層が露出する前に攪乱層があることが発見された(Dales 1977: 11)。即ち、これは盛期 Harappa 文化層の直下に横たわり、その下にある「先 Harappa 文化」層を上文化層から隔離しているのである。そして、最も注目すべきは、Balakot 遺跡における層位的な指標(Stratigraphical guide)として残されたトレンチの断面(Section)には、「盛期 Harappa 文化」層と「先 Harappa 文化」層との間に灰、赤い焼けがら、炭化物および土器破片を含む厚さ三〇〜四〇センチの堆積層が発見されていることである〔同前掲注: 12〕。

一方、Balakot では「先 Harappa 文化」に対する盛期 Harappa 文化の人々による「破壊」はなかったと発掘者は考えている。しかし、そのかわり、彼はそれらの層位上の証拠に基づいて、盛期 Harappa 文化の人々がやってくるまでは、Balakot は相当長い期間にわたって「先 Harappa 文化」の居住者たちによって放棄されていたと推測している〔同前掲注: 12〕。このように、少なくとも層位的な重なりが確かに認められた Balakot においても、Harappa 文化が「先 Harappa 文化」(初期 Harappa 文化)から直接に成長してくる過程は存在しないことが明らかになったといつてよからう。

一方、正式に発掘された遺跡ではないが、洩れた Ghaggar-Hakra 中流域の Cholistan 地域において、一九八〇年代初頭までに「初期 Harappa 文化」に属するものとされる遺跡四二箇所、「盛期 Harappa 文化」に属する遺跡一七四箇所がそれぞれ発見されている〔Mughal 1982〕。インダス流域において両者の遺跡が最も密集しているこの地域は、その文化の関係を究明する格好な手掛りを提供することができると期待されている。ところが、調査者の Mughal によると、そのうち、両者が同一遺跡で重なりあうと認められたのは僅か三箇所、遺跡に過ぎないという〔同前掲注: 9〕。その三箇所、遺跡における具体的な重なる状況については発掘が行われていないので把握することはできないが、少なくともほかの

三九箇所の遺跡には「盛期 Harappa 文化」が存在していないことは明らかである。同様な現象は、Multan 市の近くの Jalilpur [Mughal 1972, 1974]、Lahore の北西方向にある Khadian-wala [Dar 1983] においても知られているが、とりわけ上述のように、Gomal 平野一帯から Bannu 盆地をくつ Taxila 地区までの広大な範囲にわたって、Rehman、Dehri、Lewan、Sarai、Khola などに見られるように、「初期 Harappa 文化 (Kot Diji 文化)」があれほど繁栄していたにもかかわらず、その後継文化であるはずの「盛期 Harappa 文化」はどうしてなかつたに「生まれてこなかった」のである。このような事実は、層位の上下関係を分析もせずに単純な時代の前後関係にあくまでも固執し、文化の異質を無視するまで両文化の継承関係を樹立させようとする「先 Harappa 文化説」と「初期 Harappa 文化説」両者にとっては決定的な否定材料になる。

インドス平原の南東部にある Saurashtra 半島においては、Somnath、Rojdi などの遺跡に見られるように、紀元前三〇〇〇年前後にさかのぼる「Pre-Prabhas Somnath」と名付けられる土着文化が「盛期 Harappa 文化」に先行して存在するが、この文化はインド地方や北部平原における「初期 Harappa 文化」とは全く性格が異なると一般的に認められており、またその地域における「盛期 Harappa 文化」がインド方面から移動してきたものであることについては、学界ではすでにコンセンサスが得られているところである [Poshel & Raval 1989]。従って、これらの文化は系譜的には Harappa 文化と関係しないものであると考えてよい。

## 結 び

以上の検証を通じて明らかかなように、これまで「先 Harappa 文化」（または初期 Harappa 文化）と「盛期 Harappa 文化」とが重なりあうことが認められたすべての重要な遺跡において、両文化は「焼けた層」、「一時的荒廢」、「居住地のプラン大改造」、「地震による破壊」などといった形によって切り離され、直接つながってはいない。即ち、両者の間にギャ

ップが存在しているのである。

ここで特に強調したいのは、このようなギャップは単に Kot Dijl, Gunla といった二つの遺跡に限られる偶然な現象 [Mughal 1980: 85] ではなくて「先 Harappa 文化説」と「初期 Harappa 文化説」とにとって存立の基礎にあたる時代関係の認識に根拠を与えたすべての遺跡からも観測されているという点である。偶然とは決して思えない各遺跡におけるこれらの断絶は、見過ごされてもかまわないものではなくて、重なりあう現象そのものよりはるかに重大な意味をもつものであると認識しなければならない。ことにこのギャップをはさんで土器の異質に端的に象徴されたように、上下層の間に文化内容の急激な変容があった事實は、このギャップの存在意味を一層浮き彫りにする。従って、これら「初期 Harappa 文化」と「盛期 Harappa 文化」との層位的前後関係はいずれも単純にそのまま文化系譜関係に置き換えてはならないものであることが明らかである。つまり、層位的に重なりあうことは、確かにその地点では前者が後者のいわゆる盛期 Harappa 文化に対して時期的に先行することを証明するのだが、だからといって、層位関係を形成する具体的な状況を分析することをおろそかにして直ちに文化的にも両者が同一系譜に属するとする結論へもっていこうとすることは大きな過ちなのである。この点についてはここではっきりと再確認されなければならない。

上述の「層位上のギャップ」は明らかに異質な二つの文化を切り離すものである。層位上の上下関係に反映される前後関係を最大限に重視し、層位的につながってもしない異質な両文化を無理に同一系譜のものにしようとするのが、従来の学説の抱えるすべての矛盾の源ともいうべきところであった。こうして土器が表わす鮮明な異質さに加えて、層位上のギャップに対する確認は、時代関係に対する従来の理解を否定すると同時に、両文化の異質さを一層クローズアップすることになった。一方、その結果として、従来の両学説の成立根拠が崩れたのを受けて、文化関係に関する新しい解釈をおこなうことも要請されることになったのである。

前にも述べたように筆者としては土器の面に関しての両学説による「異質」という基本的認識は正しい方向にあるとか

ねてから認識している。しかし、最も疑問を抱いているのが、両学説は程度の差があるにせよ、ともに文化面におけるつながりを樹立させるために「類似性」、「共通点」および「均一性」などを極力に強調する反面、あれほど重要でかつ突出した土器の「異質性」を努めて見落とそうとするという点である。考古学、特に先史考古学の上で文化を特定するための決定的な要素である土器に「基本的な異質」が認められた以上、常識的に考えれば、その異質は文化の異質を表わすものと理解すべきである。前にも指摘したように、従来の両学説があえてこの大原則までまげて学説の成立をはかろうとしたが、そうする最大の原因は「盛期 Harappa 文化」の真の先行文化を現実的な条件の一次的な制限により発見できなかったところにあると考えられる。そこで、学説をつじつまにあったものにするために層位的な上下関係をその具体的な発現状況をも完全に無視して安易に利用したのである。

先史時代における文化のシンボリックな存在とされる土器の異質が即ち文化の異質を代表するという常識に従って、「Kot Dijii 文化」と「Harappa 文化」という二つの異質な文化実体が存在していたと考えておこう。すると、この二つの異なる文化のうち、後者は前者の上に重なってくるまでには前者の土器とはっきりと区別されるほどの自らの土器系統を成立させる過程をもっていたことも想定しなければならない。そうすると、「Kot Dijii 式土器」と「Harappa 式土器」、いや、正確にいえば、「Kot Dijii 文化」と「Harappa 文化」は、インドス平原が盛期 Harappa 文化時代に入る前に並行して発展する時期があったということになる。

実はこのことが単なる仮定ではなく事実であることを証明するのに鍵を与えたのは、Moenjo-Daro における Wheeler (1950) と Dales (1964-65) による下層の発掘である [Dales & Kenoyer 1986]。つまり、その発掘の結果(主に出土土器)により、上スィンド地方において紀元前二五〇〇年頃以前に盛期 Harappa 文化の真の前身にあたる初期段階の Harappa 文化が Kot Dijii 文化と Amri 文化と並行した形で Moenjo-Daro で存在していた証拠が極めて高い確率で提供されたのである(徐一九八八)。土器に対して比較研究をおこなった結果、盛期 Harappa 文化時代に入る前に、少なくとも

Moenjodaro (下層、現在到達している部分)、Kot Dij (一六層から四層まで)と Amri (I-C期からII-B期まで)という三者の間に並行関係が存在したことが明らかになった一方、その間、三者はそれぞれ異なる主体的な土器系統をもっていたことがわかる。そしておおよそ紀元前二千年代中頃、Kot Dij (四層の上)と Amri (II-B期の末)において一つの焼けた層にともなう「ギャップ」が現われ、その上に「インダス文明」と呼ばれた盛期 Harappa 文化が重なるように出現した。このことは、即ち、紀元前三千年代の後半、全盛期に入る前の Harappa 文化は、上インド地方において Moenjodaro を中心とする地域で発展し、近くの Kot Dij 文化 (インダス川東岸)、Amri 文化 (南方下流)とコンタクトを保ちつつ併存していたが、同二千年紀の中頃に Harappa 文化は拡張の時代を迎え、Kot Dij、Amri をはじめとする遺跡を次々と占拠し、次第にインダス平原の各地へと広がり、「インダス文明」として発達を極めた、というわけである。それらの遺跡においてギャップができたのはまさにその時期における盛期 Harappa 文化による占領の結果か、Harappa 文化の拡張を恐れての住居放棄による結果かいずれかであると考えられる。

先にも指摘したが、「先 Harappa 文化説」と「初期 Harappa 文化説」が盛期 Harappa 文化との系譜上のつながりを証明するために先行文化の中に関連要素を見出すのに懸命であった。しかし、両文化が並行して存在することが証明されること、「Kot Dij 文化」層の中に「Harappa 式土器」やその他に類似する要素(もちろん盛期 Harappa 文化期より古い時期の Harappa 文化のものを指す)が少量に混在していたとしても、全く当たり前のことというべきであろう。Mughal は「盛期 Harappa 文化」の中に三角陶板、陶製牛車枠と車輪、腕輪、平行刃の石刃、石核など「初期 Harappa 文化」時代から見られるカテゴリーが存続していたことを証拠に「ギャップ」の存在意味を極力消そうとした [Mughal 1983: 15] が、両文化が併存していたという前提に立って考えると、彼の証拠はすべて無意味なものになってしまふ。特に彼があげたそれらの遺物の多くは、実は必ずしも Harappa 文化にしか所有できないものではなくて、盛期以前の時期に Kot Dij 文化と Amri 文化と Harappa 文化とがともなうそれらを共有していたとしてもなんの不思議もないことである。

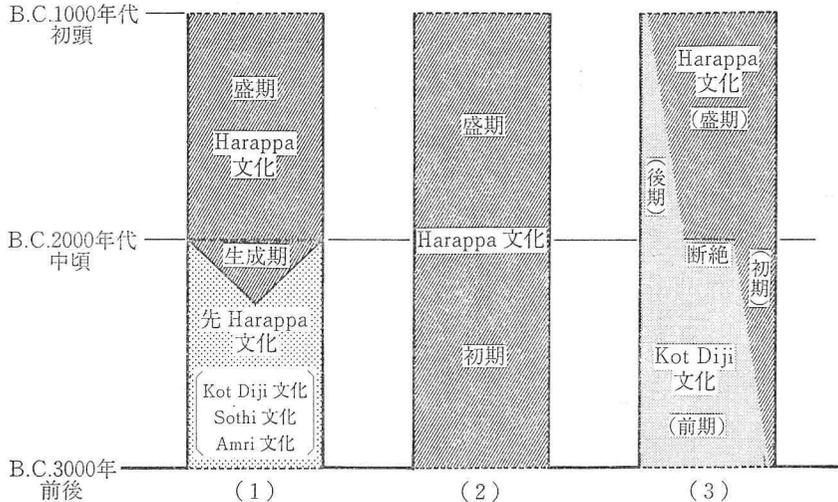


図3 インダス流域先史文化展開過程に関する認識パターン  
 (1)「先 Harappa 文化説」 (2)「初期 Harappa 文化説」 (3)「両異質文化並存説」

このように、長いあいだ見失われてきた全盛期以前の Harappa 文化が Moenjodaro に存在するという可能性が限りなく事実に近いことが確認されたことによって、これまでの学説の抱えてきた矛盾と疑問は解明に向けて決定的に前進することになるであろう。層位関係に起因した時代関係の本質を解明した以上、これまでの学説の存在根拠は崩れることが避けられない。一方、最大のハードルとされてきた「土器伝統における異質」の問題はこれで完全に解消され、圧倒的な異なる文化要素の存在をよそに、些細な類似ばかりを極力拡大解釈し、異質文化どうしを同一文化として結び付けようとする無理な作業も必要でなくなる。その結果、従来の学説の崩壊にともなって矛盾を排除した新しい理論が樹立することになった。この新しい理論の核心とは、次のとおりである〔図3〕。

インダス流域において紀元前二千年代の間には Kot Diji 文化（かつて「先 Harappa 文化」、または「初期 Harappa 文化」とされた文化実体である。また Amri 文化は基本的にはブルーチスターン丘陵部の文化と見なされているため、平原部の文化として扱わない）と Harappa 文化という二つの文化系統が併存していた。前者は一歩先に北部平原で栄えていたが、前二千年代中頃にシンド地方

で着実な発展を経て急速に成長してきた後者に優位を譲った(それからインダス平原が「インダス文明期」に入ったわけであるが、前者は滅びずに北西地方において盛期 Harappa 文化期を通して存続している)。「Kot Diji 文化」と「Harappa 文化」とが基本的に対立関係にあるため、その交替は当然前者の断絶をとまなうものであり、そのため各遺跡において層位上のギャップを残したのである。こうして、インダス流域における先史文化の展開過程を正しく理解するために、われわれはこの「両文化が並立し、前後して繁栄した」という学説を提起することによって最も確実で矛盾のない真実に迫る道を得ることができたのである。

### 参考文献

- Allehin, B. & Allehin, F. R.  
 1982 *The Rise of Civilization in India and Pakistan*,  
 Cambridge University Press.
- Asthana, S.  
 1985 *Pre-Harappa Cultures of India and the Borderlands*. New Delhi.
- Bisht, R. S.  
 1982 Excavations at Banawali: 1974-77. *Harappan Civilization: Contemporary Perspective*, G. I. Possehl(ed), New Delhi pp. 113-124.
- Casal, J. M.  
 1964 *Fouilles d'Amri*. Paris: Commission des Fouilles Archeologiques.
- 1979 Amri: An Introduction to the History of the
- Dalal, K. F.  
 1987 Binjor 1 ..... A Pre-Harappan Site on the Indo-Pak Border. *Archaeology and History: Essays in Memory of Sh. A. Ghosh*, Vol. 1. B. M. Pandey and B. D. Chattopadhyaya (eds). Delhi, pp. 75-111.
- Dales, G. F.  
 1977 Excavations at Balakot, Pakistan — Fourth Season, 1979: Preliminary Report. Typed manuscript.
- Dales, G. F. and J. M. Kenoyer.  
 1986 *Excavations at Mohenjo-Daro, Pakistan: The Pottery*, University of Pennsylvania, 1986.
- Indus Civilization. *Essay in Indus Protohistory*, D. P. Agrawal and Dilip K. Chakrabarti (eds). Delhi, pp. 99-112.

- 1988 Preliminary Report on the Third Season of Research of Harappa, Pakistan, 1988. (*Pakistan Archaeology* 12 巻 10 号)
- Dani, A. H.  
1970/71 Excavations in the Gomal Valley. *Ancient Pakistan*, Vol. V. Peshawar.
- Dar, S. R.  
1983 Khadian-Wala: The First Kot Dijjan site distributed on the right bank of Ravi. *Journal of Central Asia*, Vol. VI, No. 2, pp. 17-28.
- Durrani, F. A.  
1988 Excavations in the Gomal Valley (Rehman Dheri Excavation Report No. 1) *Ancient Pakistan*, Vol. VI. Peshawar.
- Ghosh, A.  
1965 The Indus Civilization: Its origin, authors, extent and chronology. *Indian Prehistory*. V. N. Mishra and M. S. Mate (eds), Poona, pp. 113-156.
- Khan, F. A.  
1958 Before Mohenjo-Daro: New light on the beginnings of the Indus Valley Civilization from recent excavations at Kot Diji. *The Illustrated London News*, May 24: 866-7.
- 幸崎大・藤田昌綱・谷野出穂・三浦栄一  
1980 『インダス文明——インダス文化の源流をたずねる』  
NHKトランス・日本放送出版協会。
- Lal, B. B.  
1979 Kalibangan and Indus Civilization. Essays in Indian Protohistory. D. P. Agrawal and Dilip K. Chakrabarti(eds), Delhi, pp. 65-97.
- Majumdar, N. G.  
1934 Exploration in Sind. *Memoirs of the Archaeological Survey of India*, New Delhi, No. 48.
- Mugal, M. R.  
1970 *The Early Harappan Period in the Greater Indus Valley and Northern Baluchistan* (c. 3000-2400 B. C.). Ph. D. dissertation, Department of Anthropology, University of Pennsylvania, Philadelphia.
- 1972 A Summary of excavations and explorations in Pakistan. *Pakistan Archaeology*, No. 8: 113-158.
- 1974 Early Harappan Culture from Jalipur, Pakistan. *Archaeology*, Vol. 27, No. 2, pp. 106-113.
- 1975 Present State of Research on the Indus Valley Civilization. *International Symposium on Moenjo-Daro*. A. N. Khan(ed), Pakistan.
- 1980a The Origin of the Indus Civilization. *Sindholological Studies, Summer 1980*, Jamshoro, Pakistan.
- 1980b The Early Harappan Culture Phase: A Reply,  
129 (435)

- 1982 *Purattara*, No. 9, 1977-78 (1980), pp. 84-88.  
Recent Archaeological Research in the Cholistan Desert. *Harappan Civilization Contemporary Perspectives*. G. L. Possehl(ed), New Delhi, pp. 85-96.
- 1983 Current Research Trends on the Rise of Indus Civilization. *Forschungsprojekt D/g Mohenjodaro*. G. Urban and M. Jansen(eds). Aachen, pp. 13-20.
- 1990 Further Evidence of the Early Harappan Culture in the Greater Indus: 1971-99. *South Asian Studies* No. 6, pp. 175-199.
- 1989 Possel, G. L. and Raval, M. H. *Harappan Civilization and Rojidi*, New Delhi.
- 1947 Wheeler, R. E. M. Harappa 1946: the Defenses and Cemetery R. 37. *Ancient India*, No. 3, pp. 59-130.
- Xu Chaolong (徐朝龍) 『シンドウ盛期ハリアン以前ノ土器』『史林』第七一巻第四号: 117-147.

〔謝辞〕 この小論をまとめるにあたって、恩師桑山正進先生（京都大学人文科学研究所教授）に多大なご教示を仰ぎ、そして、同僚の鶴間和幸氏（茨城大学教養部助教授）にお世話をおかけしました。また、同窓の高橋克壽氏（京都大学文学部考古学研究室助手）に大変骨を折っていただきました。併記して感謝の意を表わします。

（茨城大学教養部講師）

# Handwerker in der Reichsstadt

von

TANIGUCHI Kenji

In letzter Zeit wird es betont, daß das zünftig geregelte "alte Handwerk" vor 18. Jahrhundert weit mehr als nur Erwerbstätigkeit war, es vielmehr eine umfassende, multifunktionelle Lebenskultur darstellte. Aber bis heute ist es noch nicht erklärt, außer den ökonomischen Funktionen, wo der Schwerpunkt dieser Multifunktionalität lag. Doch das Zusammenfallen von Meisterschaft und Bürgerrecht macht es deutlich, daß das alte Handwerk als wichtigste Funktionen eine politische Rolle in der Selbstverwaltung der Stadt spielte. In diesem Aufsatz werden diese politische Funktionen des Handwrks in dem städtischen Regiment ausgeführt. Dabei werden drei verschiedenartige Reichsstädte als Untersuchungsgebiet ausgewählt.

## The Indus Enigma : Contradiction and Key Evidence

by

XU Chao-long

Nearly eighty years of studies on the rise of the prehistoric Indus Valley civilization have only yielded an unfruitful and enigmatic theory that the Mature Harappan culture emerged without a break from the 'Pre-Harappan' or the 'Early Harappan' culture over the entire extension of the Valley. The viewpoint is primarily based on dubious factors such as the fact that the two kinds of superimposed strata at several sites, representing the 'Pre-Hrappan' culture or the 'Early Harappan' in the lower levels and the Mature Harappan in the upper, exist without any gap between them, or that the pottery from both of the cultures is generally homogeneous. The author, however, dwells on a clear break between the strata discernible at Kot Diji and Gumla in particular, and

which is quite important for giving clues to solving the enigma that has emerged by ignoring a clear difference of pottery types between the two superimposed cultures that does not always represent a chronological continuity. The detailed examination of stratigraphical and pottery evidence clearly shows the break everywhere at the sites of stratigraphical superimposition. It also leads us to postulate that the Harappan culture grew up from its own seed in Upper Sind, not from the 'Pre-Harappan' or the 'Early Harappan' complex that primarily existed in the northern Valley chronologically in parallel with the Harappan culture before its mature period. The 'Pre-Harappan', or the 'Early Harappan', culture was completely different from the outset from the Harappan and the discontinuity between the strata at the sites is therefore simply a result of the Harappans' occupation of the other cultures at the time that they burst into maturity and extended their power towards the northeast and the southeast.